

## 降って来たカルマホイール 古山恵一郎

去年から当世はやりの「輸入住宅」で25軒の建て売りをやりたいというプロジェクトの設計をしていました。ほぼ、全体の基本設計が終わった頃、デベロッパーの会長さんから「家相を見ろ。」という話が出てきました。天から降ったカルマホイールであります。

この分譲地では普通に行われる雛段を避けた斜面造成を行いました。建物の設計もそれに合わせ、道路からのセットバックを取り、総二階の壁面が続くカミソリ護岸の如きストリートスケープを避けた設計を行っていたのです。したがって間取りはメゾネット併用となり、敷地のレベルに習うものとなります。合理的な間取り条件を満たした上で、便所、玄関が「良」を避けられればそうしていますが、そうでない場合にも敢えて間取りを変えることはしませんでした。

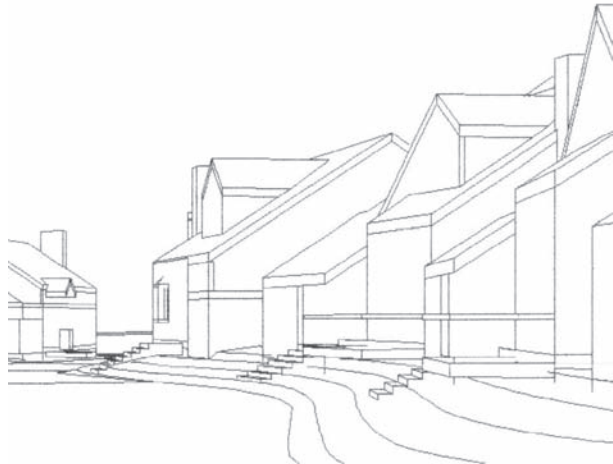
会長の信奉する家相の大家の御神託は当然ながら何棟かの不適合を指摘していました。夏休み中家相に振り回されたお陰で家相の裏側が色々勉強できました。世間では「高島流」というのが結構はやっておりますが、これの元祖の高島嘉衛門さんというお人は幕末の材木商で、なんと屋号が「遠州屋」だそうです。大方幕府御用達で天竜材を扱って財をなした人でしょう。何せ今回のプロジェクトのデベロッパーさんはその天竜材の積み出し港であった遠州掛塚湊の由緒ある土建屋さんなのです。ところでその高島嘉衛門さんが「吞象」と号して家相見になったいきさつがなかなか面白いのです。

明治4年新橋横浜鉄道の工事が始まりますが、これの造成工事を請負ったのが遠州屋さんだったの

です。それも今のような請負い方ではなく、資金は全て請負者が負担する代りに、造成によってそれまでの海岸と鉄道線路敷のあいだに出来た土地の利権を無償で払い下げてもらう、という請新田みたいな契約であったそうです。というのも新政府に事業資金などある訳がないことを遠州屋さんは良く知っており、造成工事さえ請負えば、上物の指名も簡単にとれると思っていたらしい。で、造成工事は出血サービスでやっておいて、こっちでボロ儲けとばかり、危ない橋をわたって鉄道工事の資金をかき集めたのだそうです。

ところが新政府の重役どもは「遠州屋」さんが吉原へ連れ込んで可愛い子ちゃんでもあてがっておけばあやつれたような幕府の爺い共と違い、西国の脚輕の倅ばかりでこわいもの知らずです。遠州屋さんの知らないうちに何とエゲレスから200万ポンドだかの金を借りてきてしまったのであります。「外国から金を借りるなど国を売るに等しい」などと騒いでみても後の祭、獲らぬ狸の何とやらでついに身上を潰してしまった遠州屋さんは不惑でご隠居、それも楽隠居とは程遠いお手元不如意。これを何とかしようと、ポンドさえ押し寄せてこなければ、隆々の身代を築くことが出来たはずの経営秘伝八卦の法を、200万ポンドの真相など知らず、「御一新の御威光も大したもんだが、遠州屋さん位には何とかあやかりたいもんだ」と門前に集まる町衆に御伝授して身過ぎ世過ぎに日を送りましたとさ。

白猫も黒猫も小判を運ぶ猫は良い猫という中国と違い、風水術の本場は何といっても朝鮮半島であります。おおよそプラグマティズムと180度逆の方向に500年間も突っ走った朝鮮朱子学が、風水術を高度に発達させたことを実感したのは、京城西大門監獄跡に作られた義兵運動の展示室を見たときでありました。遠州屋さんを滅ぼした200万ポンドと同様、西洋伝来の軍装に身を固めた日本軍が半島の江山を踏みつけたとき、彼の地の抗日義兵の将はどう戦ったかという、「方角」



を見たんですね。反則ナシの日本軍に対して正しさを衛り、邪を斥けるという戦いを繰り広げる。しかしこの「正しい」というのが実証主義でなく、朱子学的正しさなので困ってしまうのであります。倭賊が東から来ても、北から南に向かって攻めるのが「正しい」となるとすぐに正面放棄をしてしまう。結果はご存じのとおりであります。朝鮮戦争のときに「鉄の三角地帯」と呼ばれた共和国軍の制圧拠点である鉄原周辺も京城の良に当たります。中国義勇軍が突撃のさいにチャルメラを吹くと韓国軍は算を乱して逃げ惑ったと兎島譲は書いていますが、これなども朱子学的事大主義の影響が大きいのではないかと思います。

このところ日韓併合条約は有効か無効かという論議が出ておりますが、多分最終的な議論は朱子学方面に向かうような気もしてきます。しかしまあ、併合の談判も池田屋騒動の続きみたいですし、我が浜松市が歴史上の急成長を遂げたのも、半島、大陸方面にバカスカ綿織物を売り付けた時期でありますので、「家相なんか見てからおかしくなるんだヨ。」とこちらからはなかなか言い出しにくいのであります。でありますから今後も多分家相を珍重する人はなくならないでありますし、500年位経っても38度線では北の両班と南の両班が衛正斥邪を争っておるのではないかと思います。

(こやまけいいちろう／ASK Inc.／浜松)

## Stray Sheep

永田温子

10月25日夕方から、ここは“嵐が丘”になりました。風速25メートルを越す突風と吹きなぐる雨の中、道路向かいのスロープのフライシート下に集まっていた羊と山羊の合わせて5頭を、小屋に移動しました(と思っていました)。残りの親子2頭を探して、もうすっかり闇夜、ぬかる山坂をズッポズッポと登ったり下ったりして、やっと笹の中でうずくまっている白い子羊と、ポーッと立っているけんちゃんを発見しましたが、鳴り響く木々どどしゃ降りに仰天してか、そこから動きたくない様子。「けんちゃん、けんちゃん」と呼んだだけではついて来ないのです。あいにく、吠る役目のメートルもここにいないし、これさえあればついて来る、大好きな耳パンも持参しなかったので、『ま、いっか。明朝までここにもぐっていても』と少し考えあぐねたあと、ズボラを決め込んで、2頭を残してビチャビチャと戻りました。

そして翌朝。きょうは南側スロープに出してやりましょうと見ると、小屋からは4頭しか出て来ないのです。いつもは羊と山羊とで7頭。7-2=5なのに、黒い子羊1頭が足りない！隣のSさん家でメーメー鳴く声が聞こえるので行って見ましたが、それは山羊の“ちゃめちゃん”の発情の声でした。『Stray Sheepはどうなるの?』もうその時点で10時間余り放っておいたことになるので、どんどん行っただとすれば、連なる山奥に5~60キロ入り込んでいるかも。山探しは大変だし、羊はきっと戻るといふ確信のようなものがなぜかあって待つことにしましたが、一応ホームドクターの獣医Oさんに電話してみました。「そーんなには絶対行かない。人恋しくて近くにいるはず。羊は人里をめざすはず。」でも、「カサカサッと音をさせる黒い生き物を誰かが熊と間違えて、消防署や警察が出動する大捕物になると困るし、遺失物扱いなので、出て来たら確かに永田のものだということのためにも、市役所に連絡しておいた方がいい」というアドバイス。市役所から教わった動物管理センターのKさんは話を聞いた上で、「まだ周囲には知らせないでおきますが、近くの交番には話しておいた方がいいでしょう。」こんなことになるなんて……。気をとり直して、交番に電話する前に今一度、念のために小屋に近づくと、消え入りそうな小さな鳴き声が聞こえるではありませんか。のぞき込むと……。戻っている！暗い右奥の部屋のすみに、いつになく静かにうずくまっていたのです。『どうしてここにいるの?朝見たときにはいなかったのに……。』Kさんは電話の向方で、「良かったですねー。」Oさんは、「その小さな声は、疲れて戻ったので、赤ちゃんがえりしたのかもね。」

午後、早朝の出張から帰って来たNに、「きのうの夕方、黒ちゃんを右の小屋に入れた?」「入れたよ。」「……。Oさん、Kさん、Sさんにやっぱり事実の方をお話ししておくべくでしょうね、信用を失うとしても。父親=ブラックフェイス似の黒ちゃんって……。目さえどこにあるかわからない……。それに私って……。

そして、迷える子羊のことはこれで終わりませんでした。さまざまなきさつがあって、悲しいセーターとして、思い出のセーターとして、ついに白い子羊は白いセーターに、黒い子羊は黒いセーターになってしまうのです。11月初めの今、洗ったり、カーディングしたり、紡いだり、編んだりし始めたところです。心なしか、ふたりの母親だったけんちゃんは寂しそうにたたずんでいたりします。

(ながたはるこ／小別沢・山羊<sup>2</sup>クラブ／札幌)

7回にわたる「星座のたしなみ」。気がつくとき星をひとめぐりして、またオリオンの季節です。その間、28個の星座を紹介してきましたが、「たしなみ」としては、まあ、十分なところだと思います。そこで今回は、さらに星への興味を持つ方のために、何冊かの本を紹介して「星座のたしなみ」最終回にしたいと思います。

(1)「星座手帳」－草下英明（現代教養文庫）

高校の時手に入れて以来、一度も手元を離れることなく、長い間重宝している一冊です。文庫ながら、写真図鑑ともいふべきぜいたくな造りで、基本的な知識から、中上級者向けのエピソード、さらに、神話、その星座をとりあげた文学作品の紹介、と、日本初の天文エンターテインナー草下英明氏の、面目躍如の一冊。

(2)「横寺日記」－稲垣足穂（潮出版社 - 「東京きらきら日誌」他収録）

タルホといえば星ですが、これは「ひと通り星座知識がなければ、地求人としては名乗れないと気がつきー約一年間を費やして、全天の絵巻物のあらしを頭に入れた。」と、いうタルホが、十年後、八月～十月にかけて、そのおさらいの様子をつづった日記。いわば、ハイグレードな、本物の「星座のたしなみ」です。

(3)「星座を見つけよう」－H.A.レイ（福音館）

「ものまねおさる」シリーズで有名な、H.A.レイの、星座さがしの絵本。この本で特筆すべきは、従来のもとは、まったくちがう線で、自由に結ばれた星座の姿です。「おおくま」も「しし」も「くじら」も、だれが見ても、まちがいなくその名のおりの形。特に「うしかい」と「おうし」の出来は、ぜひその眼で確かめてもらいたいものです。

(4)「星を見に行く」－えびなみつる（誠文学新光社）

今年出たばかりの本です。「はじめてのスターウォッチング」というサブタイトルのおり、初心者の実践用にかかれた、まんが仕立ての一冊。初心者向けというと、ほとんどがまわりくどくてわかりにくい本なのですが、これは珍しいくらい、わかりやすい一冊です。特に、アウトドア派の方には、いたれりつくせりの内容。双眼鏡や望遠鏡の選び方、買い方もわかりやすく描かれています。「こんな本を作りたかった!」と、思われた一冊です。

以上、星座めぐりの楽しさを伝えてくれる本を紹介してみました。ぜひ、本屋でさがしてみてください。それでは最後に「星座手帳」からの一文を引用して、「星座のたしなみ」をしめくくりたい、

と思います。

“哲学者カーライルは晩年、こんなことをいってなげいたそうである。『どうして、だれも私に星座のことを教えてくれなかったのだろう。星座はいつも頭の上に光っているのに、私はろくにその名前を知ってはいないのだ』”

end.



街でひつじと暮らすには・1

片桐つくね

ひつじといえば、オルガンで弾いたメリーさんのひつじ。小麦粉をまぶした白い手の狼と時計の陰に隠れていた子羊。ウールマークのお出かけ用のセーター。ホルンのような丸い角。ラケットのガットと、田舎の道端に繋がれていた、白いむくむく。羊といえば、スーパーマーケットで見かけた、かちんこちんの赤くて臭い輸入肉。安いソーセージの中に馬と一緒にいるもの。学生時代の煙立つジンギスカン。大学の研究のために時々献血にご協力いただいた羊、その名もキンタ。かつて私の中では、このヒツジたちは、ぜえんぶ別のものでした。その後念願がかなって、私が北海道で畜産と関わりある仕事についたのは約10年前。北海道の羊の主流は、昭和50年頃から地方自治体のテコ入れもあって飼う農場が増えた、角がない黒い顔黒い足のおでぶちゃん、肉用のサフォーク種でした。仕事で羊を飼っている農場を訪れるたびに聞くことは、羊は簡単だと言われて飼ったのに

大変だ。売れるあてがないし、お金にならないばかりか大赤字だ。羊毛は使い道がなくて捨てている。羊はほんとは邪魔なんだ。というような寂しい話ばかり（そうじゃない人もいましたが）。ほとんどの農場主が、羊の飼い方を含めて、羊との生活に困惑していました。ちょっとむかし、日本には国営の種羊場がいくつかありまして、寒い国で戦うため軍服用ウールの国内自給自足を目指していました。また、一般の家庭でも羊が1～2頭いて、「紡がないと、あなたの冬用の靴下はないからね」とお母さんに言われて、泣く泣く紡ぎ車の前に座ったり自ら編んだりした、かつてのやんちゃ坊主、おてんば娘の思い出を持っている方が、特に北海道や東北地方にはずいぶんいらっしゃるはずです。羊は直ぐそこにいた、のです。それなのに、(黒い羊が、昔日本にいた、白い羊(コリデール種)と想像以上に違っていたとしても、)まるで馬で畑を耕す技術が失われてしまったように、羊を飼うという技術、羊を楽しむという方法が、ほとんどなくなっているのです。せっかく私が、『羊は、ひとつで全部だ』ということに気付いたのに、です。日本では家畜としての歴史が浅いのですが、地球の上で羊は、ヒトによってその地域地域に合うように、数千年をかけて改良が重ねられ、たくさんの品種が作られてきました。羊は、ヒトが食べることができないような野の草を大きな発酵タンク(羊の第1番目の胃袋。羊はなんと胃袋を4つも持っているのです)の働きで自分のものとし、良質のうんちで不毛の土地を潤し、毛も肉も内臓も乳も、私たちが楽しむことができる、とても小さな、そして、ヒトのための動物です。彼等と一緒に暮らすためのワザを、いま、のやり方で考えてみたい、もう一度、日本でヒツジをアイしてみたい、というのがこのタイトルの由来です。嘘八百を言うかもしれませんが、どうかしばらくおつきあいください。

(かたぎりつくね / 獣医師 / 札幌)



## ものけん

## もの環境研究会

連続講座「くらしをきたえる」

第1期「ものからの発言」

第1回『私の辿ったデザインの道』

8月5日、講師／柳宋理氏

(柳工業デザイン研究会代表・日本民芸館館長)

第2回『私の見たスカンジナビアデザインの黄金時代』

9月22日、講師／島崎信氏

(武蔵野美術大学教授)

第3回『私のバウハウス』

10月21日、講師／井筒明夫氏

(ノルインターナショナルジャパン取締役相談役)

■第1期、全3回を実行委員会の皆さんの協力のもとに無事終えることができました。

それぞれの回ごとに、講師の方々が身をもって体験されたデザインの近代史をうかがうことができ、意義深いひとときであったと思います。準備不足等反省多々ありますが、それをこれからの展開の糧とすることで、協力をまたよろしくお願いいたします。具体的なこれからのことについては、はっきりしていません。一部では年が明けてから現代若手建築家シリーズもありかなという話が出てはいますが……。何かこれはという内容を希望される方はものけん事務局のほうへ申し出てください。

また、講座の記録集を刊行したいと考えています。とりあえず、テープおこしの協力者をつのっています。よろしく。できあがったら実費で希望者におわけするつもりです。以下は、3回終了後の参加者の声です。(永田／事務局)

■実行委員の皆さん、ご協力ありがとうございました。述べ300人近い視聴者を集めました。ご高齢の柳先生をはじめ、井筒先生ともに熱気に溢れたご講演を頂きました。柳先生のご講演を依頼しましたときに、お世話をした戴いた田野氏は、多分NOの返事が返ってくるのでは、と思っていたそうです。しかし田野氏、大萱氏のお二人が、かつてのスタッフであった幸運によって、先生をお招きすることができたのだと思います。お二人に感謝申し上げます。島崎先生と井筒先生に際しましては、織田先生に大変ご尽力を頂きました。ありがとうございました。三人の先生それぞれに、講演後の食事の席では和やかな雰囲気の中で、さらにたくさんのお話を聞かせて戴き、楽しい宵

を過ごさせて戴きました。三人の先生方等しく大変喜んでお帰り戴けたと聞き及んで、企画の一隅にかかわらせて戴いて心から感謝しています。皆さんありがとうございました。

[中村昇 / ものけん事務局]

/ ファニチャーデザインナック]

■日本の生活レベルの向上は、モノを増やすことだったようだ。良質のデザインでなくてよかったのだ。生活者のモノに対するこだわりは、流行しているか、豪華に見えるかということになり、悪質デザインは、その中でどんどん売れてしまう事態になった。そしてモノをつくる側も、その流れの中でのデザインをした。それは、使い手を無視したモノづくりになり「よいデザイン、があいまいになった。

人+モノ=生活。生活とは、イキイキ生きること。生きる場のいえ、みち、えき、公園…、そこにあるモノはイキイキ生きるための大切な道具である。生活を楽しくするためにも。

連続講座「暮らしをきたえる」ものからの発言は私にとって、今のモノについて切実に思い直す貴重な講座だった。 [木谷和恵 / ものけん事務局]

■できればモノと対等なつきあいをしたいもんだと思う。

モノは必要があるから、つくり使われる。そこではモノとヒトとの関係は様々だが、必要以上にヒトがモノの従者になってウロウロすることはないし、アガメタテマツルなんてこともないような気がする。必要というヤツの内容にもよるのだろうけれど。

毎日の暮らしの中で、あふれるばかりのモノに首までつかりながら、急速に「豊かさ」がたそがれていく実感がある。これからの暮らしをどんなモノで支えていくかという観点で、モノづくりが、それぞれのフィールドで、あるいは互いに協議しつつ、知恵を出していくことが、今、強く求められていると思う。

近代はモノが強力に発言をし続けてきた時代である。あげく出現した沢山のモノたちの役不足・力不足。今、まともな「豊かさ」を探そうとすれば、沢山のモノの取捨選択はさけられない。そして、かつてと違う役割・力をモノに託し、ひとつづつ具体化していく責任を、モノづくりはいやおうなくしょってしまっている。もちろんモノづくりだけの問題ではないけれど。

「都市」の温存を前提にした様々なモノの存在・値うちは、足元から見直されるべきだろう、と僕は思う。足元・・・君が立っている、例えばそのコ

ンクリート製の地面、その密閉された「土」から聞こえてくるものが何かあるのではないかな？

僕は、「都市」とすでにいけない、しかし「田舎」ともいけない暮らしの場所・場面を探したい。それを組み立てる部品やディテール、プログラムはどんなだろう？

何かをふんずけたり、ありがたがったりしてというのではなく、また、ヒトばかりでない、モノや環境を含めた民主主義・・・「平らな関係」の具現化する日の到来を期して。

[永田まさゆき / ものけん事務局 / アトリエ オン]

■今回の連続講座の企画サイドの共通認識としてあったのは、「モノに力がなくなってきているのではないか」「くらしに力がなくなってきているのではないか」ということ。それでは、「モノに力があつた時代」を、その時代に生きた人に語ってもらおうではないかというところから出発した。デザイン・イヤー、デザイン会議、デザインセミナーと、デザインが語られれば語られるほど「デザイン」という言葉のリアリティーがなくなっていく。モノがあふれかえり、情報が多くなればなるほど、それらのリアリティーが希薄になっていく。1970年の万博で頂点に達した「大きいこと、速いこと、強いこと、新しいこと……」が一番という価値基準は、オイルショックをも乗り越え、生身の人間では制御できないほどモノの流れる量、時間の流れるスピードを増ながら風船は限界を越えた。そして、今年はじめの阪神大震災。あんなにも簡単に崩れるものだろうか。終戦直後のバラック（もちろん写真でしか知らないのだが）と同じではないか。そして、テレビでは多くの人がこう言うのを伝えた。「モノがこんなにあつたとは……」。まさに、ものの規格化、量産化、そして多くの人が平等にモノを持てるという近代化（バウハウスの基本理念でもあつた）の中で、物質的に豊かになったのだが、その豊かさの質を問うことをしなかったのではないだろうか。そして、今、それが問われているのではないだろうか、手遅れになる前に。故に今、「デザインの様式によって、あるべき生活の様式をつくりだそうとした」（柏木博 デザインの20世紀 NHK出版）W・モリスのユートピアに魅かれるものを感じ、モリスの限界を越えるべき産業化時代にふさわしい新しい美意識と方法論を模索したバウハウスの理念に興味を持つのではないだろうか。そして、規格化、量産化の手法が確立される前の、人の手を通して（生身の人間が、スピード・ボリュームを制御できるという意味で）、モノをつくろうとしていた柳宗理氏の1940年代、50年代、そして北欧のデザインの黄金の50年代

の幸せの時代があこがれ、その時代の証言を肉声で聞くことによって、自分も含めて参加者の一人一人が、活動のエネルギーの一つとなる“KEYWORD”

のようなものをみつけることができれば、と思っている。

[高橋三太郎 / ものけん事務局

/ 家具工房 SANTARO]

■三回の講座を通して、それぞれの講座の方のデザインや、ものとのかかわり方、「お人柄」のようなものが、感じられました。中でも三人の方が共通して「過去のことを学ぶことが、新しい創造につながる。」という意味のことを語られたのが印象に残りました。また、このシリーズの「暮らしをきたえる」というテーマですが、結局のところは、作家やデザイナー自身が誠実な作り手としての暮らしをきたえなければ、生み出されたものが持つパワーもなくなってくるのではないかと、思っています。

[煙山泰子 / 実行委員 / KEM工房]

■このシリーズは、人が集まって、知識としてその場のなるほどなるほどで終わらせるのではなく、そこから感じたものをそれぞれが作ったり考えたりする中で、いかにして生かしていくかということに、本当の意義があるのではないかと思います。今後どのようにそれらが結実するのか！（あるいは、しないのか！）楽しみです。

[伊藤千織 / 実行委員]

■今回の講座では、デザインするにあたって、何が私たちの暮らしを豊かにすることにつながるか？ものを見る目、デザインについての考え方、そしてデザイナーに求められていること、また、持っていなければならないことなど、現在活躍されている方々の考えを聞くことのできる良い機会となりました。ただ、今回の講座は、どちらかというと、この業界のプロ用の内容だったようですが、もっと一般的な人達も参加してもらえると（例えば私達のクライアントとなるエンドユーザー等）家具への、住まいへの考え方をもっと底のほうからきたえることができるのではないかと思います。私達プロが「きたえ」、勉強することはあたりまえのことですが、その「きたえ」たものを購入する、使用する方々が多くなければ、どちらも豊かには成り得ません。これから活躍する若い人達もしかり。家具、すまいに対する見方を「きたえ」てもらい、広めていくことが、豊かな社会のわりには貧弱な

暮らしをしている私達日本人が、本当に豊かに住まうことができる第一歩ではないかと思います。

[加藤友美 / 参加者 / インテリアデザイナー]

■今回3回に渡り行われた講座では、それこそ「暮らしを鍛える」に相応しい大きなテーマで、器から、大規模な公共施設等、様々な作品群が生み出されるこれらの源泉を知ることができ、又、常に変化し続ける時代背景の中を生き続けるデザインを観、感じる事ができたことを、素直に感想として述べたいと思います。ただしその中で、未熟ながらも自分自身のデザインというものの実際のプロセスに活用できるお話し等がいろいろとお聞きできなかった点と、講師の方々のお話が会場の関係等もあり聞き取りづらかったのが、残念に感じています。今後ともこの連続講座の開催が、様々なテーマで様々な発言が行われることを、強く期待したいと思います。

[渡辺元子 / 参加者 / インテリアサンライト]

■私以外のお骨折り頂いた実行委員の皆様と、御講演の招聘のきっかけを提案下さった、特に織田憲嗣委員会顧問には、私自身感謝したい。今回運営委員が招聘願った、柳宗理（第1回）・島崎信（第2回）・井筒明夫（第3回）各氏は1930年代前半までにお生まれになった方々で、彼等の遭遇した貴重な体験はまさに、日本の現代の成長期へ向かう混乱期からの目撃者としての意義を感じずにいられない。いま、私達にとって、この時代/この地域においてどのような点に意義を見出し、洞察を持った視座で活動が展開でき得るかについて、身を引き締める思いの機会を得た時だった気がしている。改めて御三方に感謝を申し上げます。Atentamente.

[木下泰男 / 実行委員

/ 北海道造形デザイン専門学校]

## こんどのものけん

### 「北欧のかたちの現在」

講師 / 伊藤千織 / ペーター・ヘルクビスト

■ 11月17日（金）午後7時～9時

■ 会場 / ワールドレストラン3階（パンケトルーム）

札幌市中央区南1条西2丁目

☎ 011-241-2050

■ 参加費 / ￥2,000（飲物付）

■ 参加予約 ▶ もの環境研究会事務局 / 高橋三太郎

〒002 札幌市北区拓北6-2-5-23、

Fax.011-773-6676

『バブルの頃には「終わった」といわれた北歐デザインも、このところ世界的なナチュラル指向でまた目を向けられています。「黄金時代」は過ぎちゃったけど、それでも宿っている精神は同じ。日常生活、デザイン教育、公共空間、家具づくりの現場などなど、生活快適第一主義のデンマークデザインの近頃はどうなっているか。スライド・漫談つき。』

～伊藤

## いとうちおり

1966；札幌生まれ、1990；女子美術大学産業デザイン科卒業、1992-94；デンマーク王立美術アカデミー建築学校研究生、札幌在住

## Peter Hellqvist

1955；スウェーデン生まれ

1985-1989；在日、スウェーデン交流センター木工工房インストラクター、北海道東海大学デザイン学科講師、1989-1990 エーテボリ大学デザイン学科講師、現在、アーリングス在住。”WORKS” 主宰。

---

## 祈りは続くよどこまでも

## 三上敏視

8月6日の広島に続いて、10月22日に富士山で祈りの場を持った。何年か前に関西気功協会の主催で富士浅間神社の山宮でアイヌの長老による祈りをしてもらったのだが、その後ほったらかしになっていたのと、聖地としての富士の存在が仲間の「祈りのネットワーク」の中で大きくなり、新しい形での「富士講」をやってみたかったのである。以前にアイヌの祈りをした理由は、その山宮にヤマトタケルがこの地にいた人々を征服し、それを宣言したという碑文があり、その人々はおそらくアイヌとつながる人であろうと言うことで、神事と先祖供養をした。富士という名前はアイヌ語のフチ（大いなる母）から来ていると言う説もある。一方「富士講」は江戸時代に隆盛になった民間の富士山岳信仰で、修験道の流れを汲むものだが、最近は盛んではなくなっているものだ。しかし富士吉田などには今でも「御師（おし）」と呼ばれる民間の神官達がいて、火祭りなどの儀式を司っている。

西荻のほびっと村でプラサード書店をやっていたキコリの実家が御師の宿と言うことでその時の富士の祈りをきっかけに彼は実家に戻り、御師に加わり新しい形の「講」も模索していることもあり、今回の祈りとなった。やり方は超宗教の「我々流」だが、メンバーは神道学者だったり、密教僧だったり、ヨガや気功の先生や、風水研究家、音楽家、世界の聖地めぐりをしている医師とか、普段から根源

的な祈りに関心のある仲間が集まっているので、富士の裾野で祝詞をあげたり、奉納演奏をしたり、舞ったり、供物を捧げたりの様子を行い、昔、修験者達が修行をした「胎内窟」と呼ばれる地底の洞穴に潜って般若心経を唱えたりした。広島の儀式時のフィリピンの映像作家キドラット・タヒミックもまた別のイゴロット族の仲間と息子を連れて参加、寒い中フンドシーつで踊ってくれた。

なんで我々（この場合は私と妻のみかみめぐる）がこのように祈りにこだわるようになったかと言うと、ひとりのアイヌのシャマンとの出会いがあった。「ウパシクマ」という本に書かれた二風谷の青木愛子というそのフチ（おばあさん）を、関西気功協会のアイヌ自然医学ツアーで訪ねるためにお願いに行ったのがその最初だった。フチは知り合ったすぐ後に体調を悪くし、シャマンとしてのパワーは衰えてしまったのだが、それでも我々を驚かせ、神と呼ばれるものの存在を実感させてくれるようなことは幾たびもあった。自分で五代目となる産婆術を霊的に母から受け継ぎ、驚異の成功率で赤ん坊を取り上げたほか、独特の整体や薬草術、時にはアイヌで伝統的にトウスと呼ばれる降霊やウェインカラと呼ばれる霊視などで、多くの人々の心身を癒してきたのだが、それを殆ど無償で行なってきたために生活は貧しく、しかも自分や自分の家族は治せないという「つらい役目」を背負って生きていた。これまでガン手術を2回やり、脳腫瘍の診断を受けて病院から逃げだしたこともあったし、最近は目まいと心臓病に悩まされていた。

そんな苦しい中でなぜそこまで他人のためにフチがするのかというと、それはカムイ（神）とのつながりからだった。フチはいつも事ある度にアイヌ語で祈っていたし、神のメッセージを受けていた。おみやげの一つ受け取ったときも必ず祈ったし、私の体調が良くないとみると煙草をふた口ふかかせてから祈ってくれた。訪ねた帰りには安全を祈ってくれて、実際に危ういところで事故から免れたこともある。

私の父が具合の悪いこと、太っていること、年齢の割には弱っていることなどを見抜いて祈ってくれたこともあった。薬草をくれたときにはまず「信じるか」とたずねた。自分が信じることによって、フチのカムイとつながり薬草が本当に効いた。このあたりから信じれば必ず天に通じると実感し、それぞれの人にそれぞれの神が応えてくれる宇宙の無限の懐の深さを感じ始めた。最近のフチは深いため息をついて生きているのが辛いという様なことを言っていたが、それでも生あることを喜んでいたように思う。神が「まだ生きる」と言っていたようだ。

そのフチが富士から帰った翌日の24日早朝に亡くなった。22日に血圧が下がり、苫小牧の病院へ行き、そこで一旦快復し、二風谷の隣・平取町の病院に入り、亡くなる一時間前まで家族とよく話し、眠るように逝ったということだ。22日と言うと富士の裾野で祈っていた頃である。めぐりが女性達だけでアイヌの先祖供養から学んだ心で、祈りを初めて司った頃だったはずだ。厚い雲がかかっていた富士が夕方見事に晴れて、その神々しい姿を見せ、我々が儀式の成功を実感していたその頃にフチはカムイから「そろそろ来てもいい」と言われていたのかも知れない。

フチから教わった事は祈りの心と共にウテキアニということである。ウ=互いに・テク=手・イ=それを・アニ=執るという意味のアイヌ語で、フチによれば今のシャモ語（日本語）で「愛」ということだそうだ。世界中で神の道は一つ、昔も今もそれはウテキアニだとフチは言っていた。享年82才で逝ったフチだが、この歳のしかも北海道の小さなアイヌの村に生まれて「愛子」という名前がつけられたと言うのも深い意味（カムイの導き）を感じる。

23日に富士山から戻り29日に今度は神戸、淡路島に祈りに行こうとしていた我々は告別式で運良くフチと最後の別れが出来た。眠るような安らかな顔をしていたが、肉体は借り物ということも実感した。それほど生きていたときの魂の波動が強かったわけで、むしろ遺影の方が生きているようだった。（写真に波動がプリントされるということもここで改めて感じた。）残念ながら葬儀はアイヌ式ではなく、仏式だったが祈りの心に違いはない。

棺を載せた車が動き出した瞬間、曇り空から陽光が射して我々もカムイに包まれた思いがした。

<参考図書：「ウパシクマ」樹心社／別冊宝島EX  
「アイヌの本」宝島社>  
(みかみとしみ／MICA BOX／札幌)

## コンピュータでモノを考える 坂井正周

コンピュータの中でモノを考えるということは可能なのだろうか。

コンピュータをある程度使い始めて大体最初に思い当たる疑問の様で何人かの知人からこの台詞を聞いた事がある。可能かどうかはともかく、使う以前にモノを考えていた状況とは大きく異なることは確かだと思う。特に設計のアイデアとかプランに関しては、大きな紙にランダムにメモやらエスキスやらを思うままに書き込んでいたのが以前より大きくなったとはいえ17インチモニター上である。まともに面と向かってモニターを睨みつつマウスを片手に額に汗にじませて、うーんと唸ってみても、昨日まで鉛筆をA2の紙の上でころがしていた輩には全く不慣れな行為で……。でも、何でこんな滑稽な事をやってしまうかは、多分だれもがコンピュータで何かできるのではという漠然とした期待の中にどこかできっと、コンピュータを前にして機能さえ手慣れてしまえば今までに実現出来なかった、頭の中のアイデアやデザインが沸き出て自然とモニター上に描かれるのでは…というのがあるのかもしれない。でもって、いざ実際やってみると…”何か違う”という漠然とした違和感に気づき、そこで出る台詞が前出の一言なのじゃなからうか。

まさに人によりけりなのだろうけど、僕は思うに、要は根本的に期待の持ち方にまちがいがあり、前にも言ったかもしれないが、コンピュータは決して自動アイデア製造機でも、自動デザイン製造機でもなく、鉛筆や定規等の道具の延長線上にあるのにすぎないと思う。しかし、この表現にもあえて付け加えるなら、やり方次第ではわれわれが鉛筆でアイデアを考えるように、マウス片手にできない事はない。ただ、同じようにやってたんじやだめという事。全く発想を変えて、自然体でそこに立ち向かえる様にならなければいけない。しかし、これは大変な事で、そんな状態になれるにはかなりの修行が必要。というのは、意識の変革というのは、そう簡単に出来るものじゃないし、

11月11日（土）、12日（日）

### 第4回はらっぱひろっぱ・くさっぱらまつり

くさっぱら市場、すもう大会、くさっぱら美術館、音楽会、月光パフォーマンスなど  
くさっぱら公園

東京都大田区千鳥 1-1

主催／くさっぱら公園運営会議

問い合わせ／野々村：03-3756-2763、高田：03-3750-8907、下中：03-3755-9352





何十年とやってきた事を根本的にひっくり返して捨てて…なんて、だれでも大変な事だと思う。僕も自分なりに色々と努力をしてみたし、少しでも自然体に近づける様に、例えばマウスじゃなくペンダブレット（電子ペンをプレートの上でなぞると絵がかけるというアレ）にして紙の上にエスキスする様にさらさらとは…いかなかった。マウスとかペンの問題でなく、TVの様なモニターの前に座って、目は前をみて、手元でペンを動かす行為の違和感の中々乗り越えられないし、多分、直接モニターにペンをこすりつけて絵を描けるようなシステムにしても同じ事だと思う。だから、情けない事にコンピューターを使って図面を書くようになって10年たつが、今だにプランのエスキスは製図台の紙の上や、所構わず思いついた場でやっている。つまり、僕にとってのコンピューターは今だに清書機の域を脱していない。共にモノづくりを考えてくれる便利な箱にしてゆけるにはまだ相当な時間がかかりそう、なのである。

でも、いつかは出来るかもという可能性だけは感じている。というのはコンピューターを作り、ソフトを作る側の最終目標がそこにあるのを感じるのと、少しづつではあるけど、人間の精神的な所とコンピューターの機能が近付きつつある様、開発者達の必死の努力が時折かいま見えるからである。それがいいとか悪いとかでなく、いずれそうなるって当然の事だと思う。何故なら、それが最初にパーソナルコンピューターを作る人の頭の中にきっかけ（キーワード）とヒントになっているからだと思う。（アランケイのダイナブックか！）

話は変わるが、最近ウインドウズ95なるソフトが巷で大変なブームと人気であるが、あれは全くマスコミと売り手側のタイアップによるものにあやかっただけだということを感じる。というのはMacを使っている者がウインドウズ95を使ってみると（実際にデモ機で使ってみたが）、正直な所、とても使いづらく、センスのないMacの様だった、という感想。つまりMacのいい所だけ真似してる（本当に真似なんだから！）のに過ぎず、その割には今迄のMSDOSのMacフリークからは考えられない不便さも当然見え隠れしている、それだけのしょうもないモノだと思う。

くれぐれもマスコミに乗せられて手を出さぬ様、気をつけて下さい。と言った処か。

（さかいまさちか／お茶の水設計工房スタジオ 808  
／札幌）

## ガレキに花を咲かせましょう～阪神市街地緑花再生プロジェクトへご協力のおねがい伊藤千織



これはほんとに現代のできごとなのか？と目を疑いたくなるような大惨事で幕をあけた95年。阪神淡路大震災は、都市がどうやって焼け野原になってしまうのか日本中の人達がリアルタイムで目撃するというショッキングかつ、まちって一体なんなのだろうと考えさせられるできごとでした。その焼け跡にも夏がきて秋がきてもうじき2度目の冬になります。

今年の終わり、神戸と芦屋の13の廃墟跡に可憐なコスモスの花が咲きました。仕掛け人は、神戸の建築家や都市計画の専門家のグループ「コープラン」を中心とした阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワークと地元住民のひとつと。被災地を花と緑で彩ろう、人々のところに安らぎと勇気をとということで始めた緑花再生プロジェクトの一環として、ガレキを耕して花の種をまきました。このプロジェクトは「ガレキに花を」に始まり、「家々に苗木を」「まちに生垣を」「都市に広場を」と続き、今後も被災地の「緑」の復興を進めていく予定です。主旨に賛同して下さる方にTシャツ購入という形のカンパを募っています。和田誠さんデザインのシンボルマーク入りTシャツ、エプロン、バッグなど色も形もいろいろあります。（なかなかグーですよ）お値段は1500円からあなたの「言い値」で。詳しくは、伊藤千織(011-811-8678)または宮脇檀建築研究室／今泉 (03-3464-6900)までご連絡ください。リストなどをお送りします。送料節約のため、なるべくグループで申し込んで下さればと思います。

11/4 (土) ~ 28 (火)

HARVEST 遅い収穫

川股弘昇・木の家具展

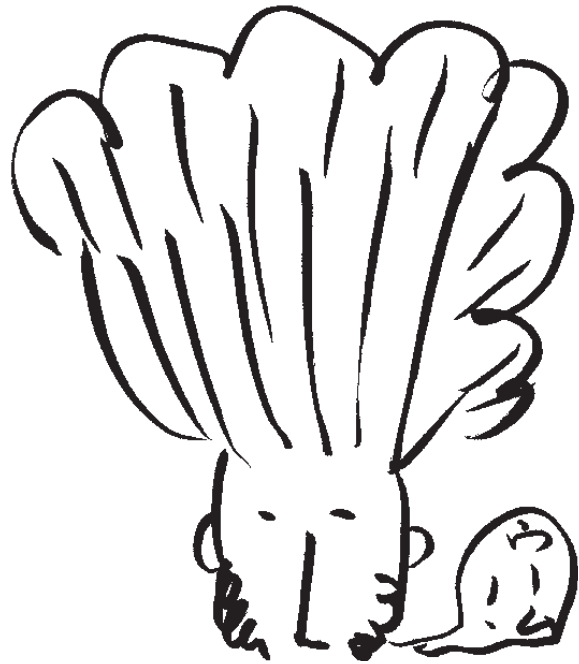
ギャラリー R・BOX

札幌市北区北9西2

松下電工ナイスプラザさっぽろ 3F

☎ 011-727-5066 10:00 ~ 18:00

「私事ですが、11月でとうとう40才になります。そこでひとつの区切りとして、これまでの仕事の集大成的な家具展をしようと考えています。これからも残したい!!作り続けて行きたい家具の展示会になると思います。いわば、very best of・・・というところでしょうか。ですから新作はできるかどうかわかりません。ご期待の方あしからず!」



画・伊藤哲哉

11月17日 (金)

ハンス・マルティン・リンデ

リコーダーリサイタル

ロバハウス

東京都立川市幸町 6-22-32

☎ 0425-36-7266 (西武新宿線、玉川上水より上水沿い歩いて5分) 19:00開演  
前売り / 4,000円、当日 / 4,500円

12 / 12 (火) ~ 24 (日)

松原成樹作陶展

「器のはじまり」

札幌・銀花ギャラリー

札幌市中央区南2西3 Kビル 2階

☎ 011-241-5252

10:00-19:00 (月曜休)

●ハム、ウインナ作りと、フェルトの帽子作りを繰り返します。興味のある方はご連絡を。(アトリエ オン/永田温子)

ハム、ウインナ: 11月17日、23日、12月3日  
いずれも午後から

フェルト: 11月12日 10時ごろから

## 編集後記

永田まさゆき

■冬が足踏みしてる。畑の野菜をまだ食べられるなんて珍しい。へんな夏だったけれど、今度はへんな冬か。遅かったかな?と危惧した開拓団の白菜は、まあまあ出来で、霜にも初雪にもあたったから、きっとウマイ!あとはキムチ?ドースル?!・・・開拓団のみなさんはそれぞれに忙しく、僕もそれなりに・・・であって宣言したほどの開拓はできなかった。それでも栗の木の下のカマザサをある程度刈って、栗の実をせしめようと努力したのだが、気がついたときには栗鼠はじめ動物諸君のとり分となっていて、まあいいか、来年は羊の草地だわい。2~3時間と決め、「るすでん」にしてガーガー草を刈っていると、すぐに半日いや丸一日なのであって、いやはや仕事が・・・! タノシイ。

■住宅街のはずれの山ぎわに住む一家が訪ねてきて「羊を飼ってみたいんですけれど」。そう、羊よ街に出てゆけ!!住宅の庭に、団地の芝生に、川の土手に、公園に、校庭に、道路に、空き地に・・・。草をむしゃむしゃ食べ、うんちをぽろぽろたれ、ヒンシュクをかいながら我が物顔で居座り、ヒトに知らしめよ。『街という囲いの中で君らだけがいつまでもシアワセにやっつけていけると思うなよ。』